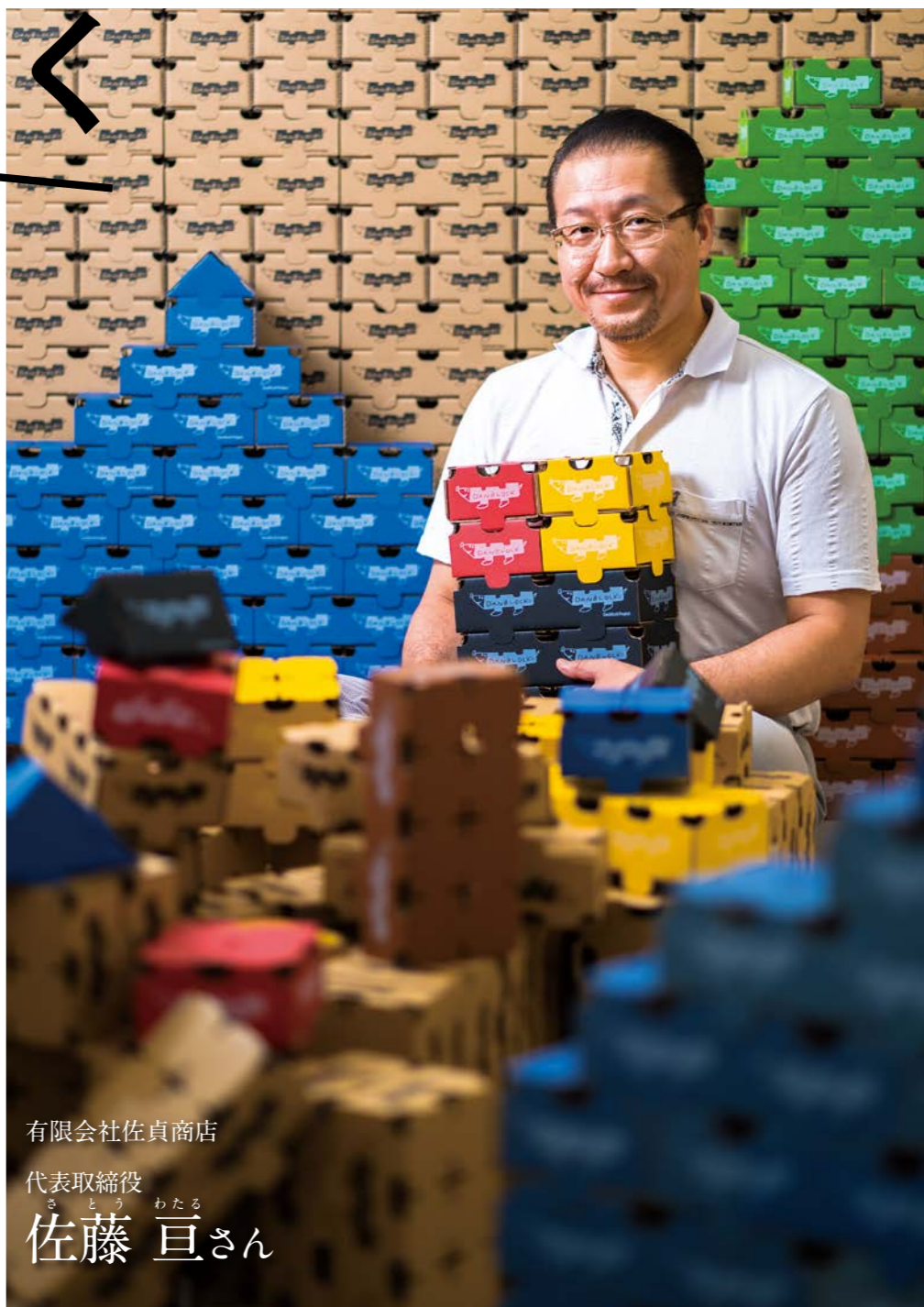


あすを拓く

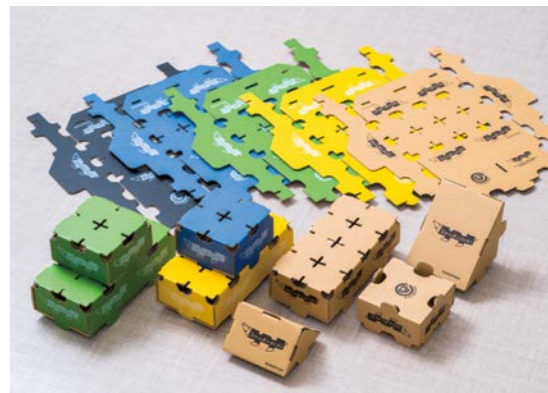
ダンボール製のブロックで「段ブロック」。
そのシンプルなネーミングから想像できない
無限の可能性を秘めたオリジナル製品が、
次々と新しい市場を開拓している。



有限会社佐貞商店

代表取締役
佐藤 亘さん

プロフィール
1966年、塩竈市生まれ。東北学院大学経済学部卒業。92年、有限会社佐貞商店入社。2007年、代表取締役に就任。ダンボール製の知育玩具「段ブロック」を開発し、ダンボールの新たな可能性を掘り起こす



同社が開発した段ブロック。1枚のダンボールを箱状に組み立てるところから遊ぶことができる。自由に組み立てた後に、豪快に壊す楽しみが魅力だ

ティッシュ箱サイズの長方形とその半分の正方形、そしてサイズが異なる三角形が2種類。有限会社佐貞商店が開発した「段ブロック」は、4種類の形状をしたブロックを組み合わせることで、様々なモチーフを造型することができる。

「軽くて安全なので子どもでも安心して扱うことができるし、騒音もほとんど出ない。壊れてしまっても、ダンボールはリサイクルが可能だから非常にエコ。段ブロックは、子どもも大人も一緒に遊べる世界最強のコミュニケーションツールです」と佐藤社長は胸を張る。

包装資材という固定観念から発想を転換し、ダンボールに新たな価値を創造した佐藤社長。「これまでのたぐさんの出会いとつながりが、ダンボールに新たな活躍の場を与えてくれました」と話した。

ダンボールの可能性を模索する日々
子どもたちの発想力に感銘を受ける

「パパ友」とのタッグで検討を重ねる
原点回帰で段ブロックの製品化に着手

「モノづくり」と「コトづくり」
開発から学んだビジネスモデル

創業当初は、魚を入れる木箱を製造。その後、ダンボールや化粧箱の製造に着手し、水産加工品などを入れる包装資材を提供する。同社はこれまで70年近く、「箱づくり」で塩釜の基幹産業である水産業を支え続けてきた。

東日本大震災では、本社社屋が津波の被害を受けたが、別の場所にあった工場は被害を免れたため、ダンボールの製造をすぐに再開することができた。しかし、震災前からの取引先の多くが被災し、中には廃業を余儀なくされたところもあったという。

「復興最優先で、目の前の仕事に必死に取り組んでいましたが、復興需要が落ち着いた後のことを考えると、事業の先行きはとて不安でした。このまま箱だけを作り続けて良いのだろうか、思い悩む日々が続きました」

転機は、思わぬ形でやってきた。当時、子どもが通っていた幼稚園に、運動会などのイベントの後片付けなどで使ってもおうとダンボールを寄贈した。参観に訪れた佐藤社長は、子どもたちがそのダンボールを使って作った紙芝居や大きい絵本などを見て衝撃を受けたという。

「制約にとらわれることなく、思い思いのものを形にする、子どもたちの自由な発想に心が揺さぶられました」と佐藤社長は振り返った。

同じ時期に、幼稚園の保護者だった東北大学工学部の佐藤一永准教授から、ダンボールを使った教材開発の相談を受けた。教材の実用化に向けた取組は、東京にあるメーカーへの訪問までこぎつけたが、条件が折り合わず断念することになった。

それでも、ダンボールに秘めた可能性を信じていた佐藤社長と佐藤准教授。帰りに入った居酒屋で交わした会話から、段ブロックの構想が生まれたという。

「幼稚園での子どもたちの発想力を見て感動したという原点に立ち返り、子どもの創造性を伸ばす知育玩具ができるのではなにかという話で盛り上がりました」

こうして佐藤社長は、2016年から箱の抜き型を作る技術者や工場のスタッフとともに試作に着手。強度を保ちつつ、子どもでも扱いやすい形状を1年半かけて試行錯誤したという。

完成した試作品を教育イベントや地元の夏祭りなどで使ってもらったところ、「これはすごい！」と関係者から称賛された。段ブロックの評判は口コミで広がり、保育園をはじめ児童施設や科学館、自動車のディーラーのキッズスペースなど、様々な場所で行われるようになったという。

「予想をはるかに上回る反響に、大きな手応えを感じるようになりました」と佐藤社長は話した。

その後も段ブロックは、工具メーカーの展示会場に設置するオブジェに採用されたり、人気ゲームシリーズの最新作のキャンペーン会場で使われたりとプロモーションツールとしても関心を集めた。

「現在、段ブロックに広告や企業ロゴを印刷したものを社会貢献ツールとして寄付していただく提案をしています。子どもたちも広告主も笑顔になれる。まさに『三方良し』のビジネスモデルです」

昨年9月から今年2月にかけて、宮城教育大学付属小学校（仙台市）で段ブロックを活用した教育プログラムが実施された。児童の段ブロック遊びをはじめ、同社のダンボール工場の見学や段ブロック誕生にまつわる出前授業などの取組を通して、佐藤社長は「段ブロックの教育分野での可能性について認識を深めることができました」と話す。

これからは、「モノづくり」だけではなく、新しい付加価値を創造する仕掛けを考える「コトづくり」も求められることを、段ブロックの開発を通して気付かされたという佐藤社長。

「子どもたちが夢中になると、周りにいる大人も一緒に楽しくなります。人と人との心をつなぐ場を生み出す段ブロックを、これからも全国に届けていきたい」と力強く語った。



東京都内の保育園で行われたイベントに、120人の子どもたちが参加した



大手ゲーム会社のオファーを受けて、新作ゲームのプロモーションツールに採用された



「段ブロックを通じて、たくさんの夢と笑顔を届けていきたい」と語る



有限会社佐貞商店

1950年に塩竈市内で魚箱（木箱）の製造で創業。その後ダンボール箱や土産物用化粧箱など、包装形態の進化により、様々な包装資材を取り扱う

■所在地

塩竈市新浜町 3-19-9
TEL 022-365-3391

http://satei-hako.co.jp/

